

建築から町の歴史と文化を考える

旧矢崎商店

旧矢崎商店は、御田町にある生糸問屋の旧商家。道路に面する西側は洋風の外観、東側の庭から見ると和風の日本家屋という、少し不思議な古民家です。製糸業で栄えた下諏訪町を象徴するこの建物は、当時の歴史や文化をうかがい知ることができる貴重な資産です。

ここからは令和6年度に行われた信州大学との建物調査・研究の結果を、御田町文化研究会の視点で抜粋・編集した内容としてご紹介していきます。調査を行ったことで、建物の価値はもちろん、当時を生きた人々の考えや精神にも触れることができました。

建築の価値

2つの価値観が融合した建築

旧矢崎商店の建築的な価値は「和＝質の高い大工の手仕事」と「洋＝国際感覚も反映した最新のデザイン」の2つが融合している点にあると言えます。また、その2つが下諏訪町の歴史・文化に裏付けられているという点に独自性があります。

旧矢崎商店には、下諏訪町の歴史や文化、それに紐づく高いデザイン性や思想が詰め込まれています。



旧矢崎商店の「いま」と「これから」

旧矢崎商店は、令和4年度に下諏訪町が新たな交流拠点として活用するために取得した建物です。現在は文化財への登録を目指して上述の調査と研究を進めています。将来的には店舗の誘致なども行いながら、地域の方や、移住者、観光客…地域内外の様々な方が訪れ、町の歴史や文化に触れられる拠点として、活用していく方針です。



建築の変遷

戦争の影響により変遷を繰り返した建築

旧矢崎商店は、昭和11年の竣工以降改築を繰り返しています。ここではその建物の変遷を簡単にご紹介します。



竣工後の旧矢崎商店の様子

昭和11年 / 1936年

生糸問屋である矢崎家の当主矢崎栄氏が施主となり、「生糸問屋 矢崎商店」として竣工。当時は立派な門構えを有する和風建築でした。



当時の外観を構成したと考えられるスクラッチタイル

昭和20年 / 1945年

戦時下における家屋の強制疎開で道路に面する部分を解体。解体後は一般的な看板建築のような外観であったと考えられています。

建築の用途

多くの人が行き交う 多様な用途の空間

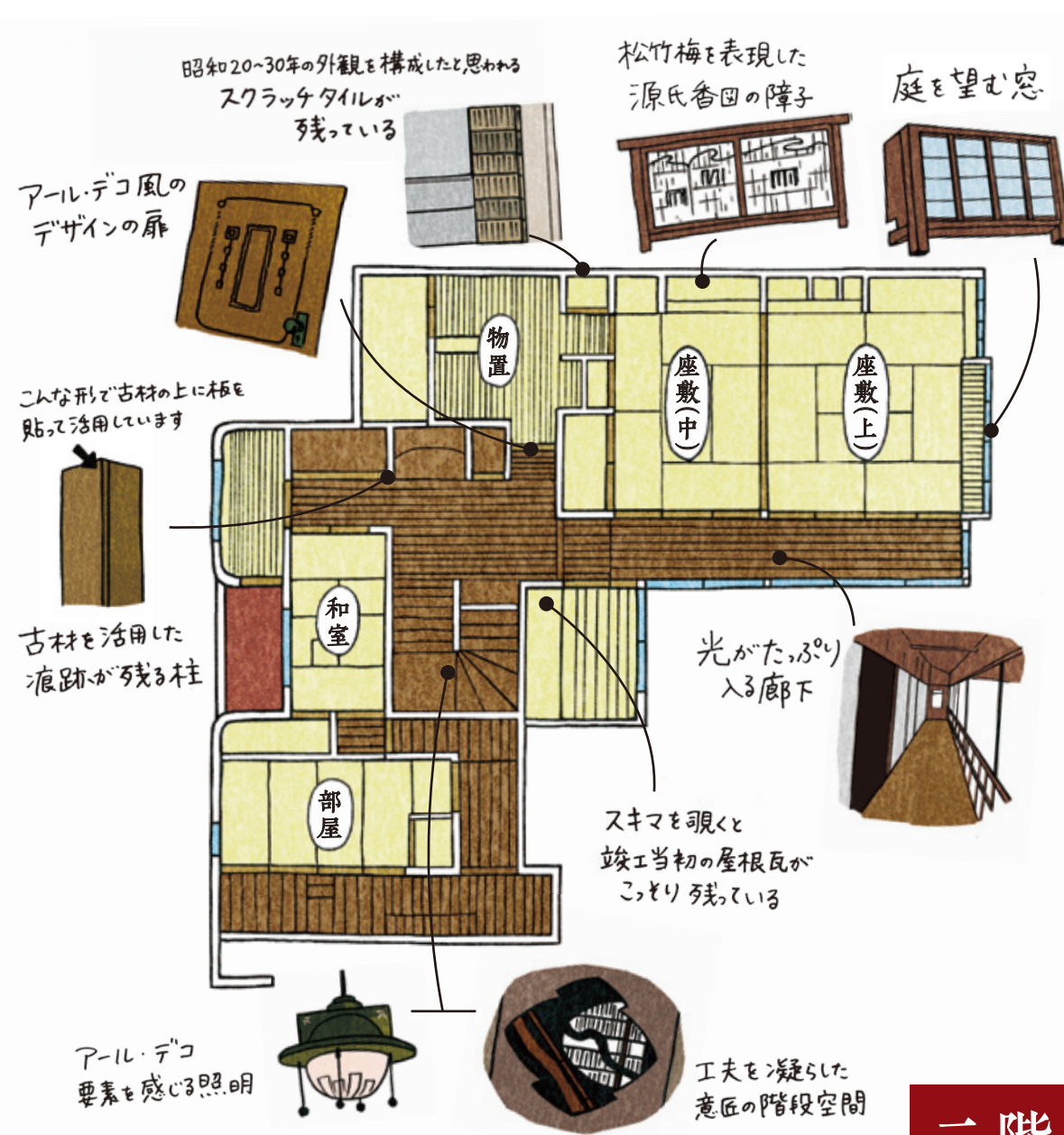
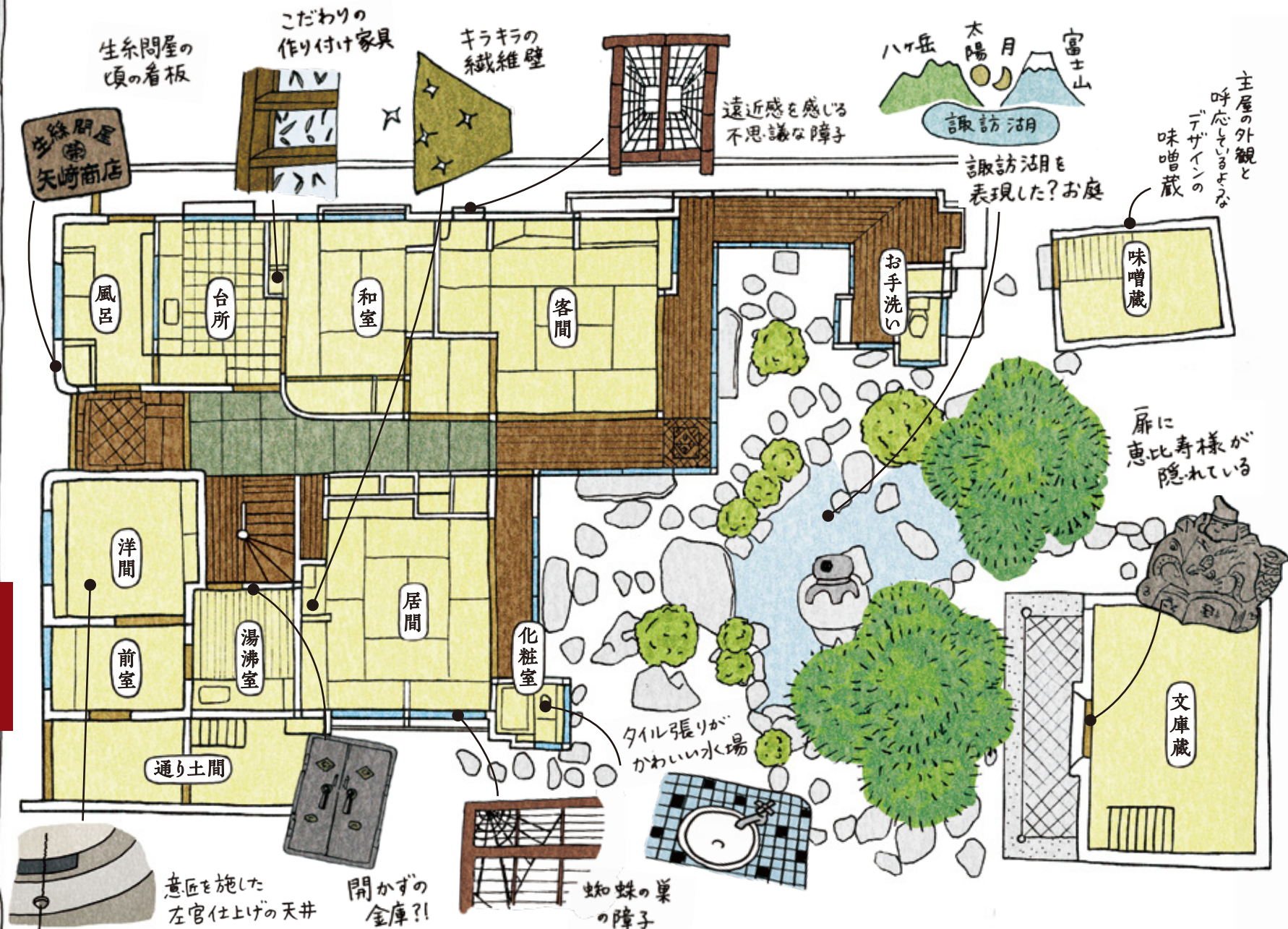
生糸問屋の商家として使われた旧矢崎商店は、生糸の梱包や配送手配を行う作業場、取引先との商談を行うもてなしの場、家族や使用人の生活の場など、様々な顔を持つ空間でありました。また、矢崎家は地域でも有数の裕福な家であったことから地域との関わりも多くありました。地域の方々の出征の際に庭園が記念撮影の場となったり、テレビを購入した際には地域の子供達が土間から窓を覗いたり、行き場のない近所の方が住んでいた時期があったり…商家と地域の接点が濃かった時代背景が思い浮かびます。



和風の建築に洋風の外観を取り付けた現在の姿へ

昭和30年 / 1955年

増改築を行い、現在の洋風な外観を設置。この時期に内装の一部も改装されています。



建物の意図を感じ取る視点

旧矢崎商店は質の高い手仕事で作られた建具のひとつひとつに細かなこだわりを感じ取ることができます。しかしそのデザインに込められた当時の意図を正確に把握していくことは困難です。そのため是非していただきたいのが「想像」です。旧矢崎商店を建てた矢崎栄さんの人柄を思い浮かべて、そのデザインの意図を想像し、「わからないことを想像で楽しむ」という見方で、是非建築を楽しんでみてください。そんな楽しみをしていただくために、ここでは旧矢崎商店の施主である矢崎栄さんについてご紹介します。

矢崎栄



- 明治35年(1902年)生まれ。
- 大正末期に下諏訪立町の製糸家へ丁稚奉公へ。
- 昭和11年(1936年)旧矢崎商店竣工。番頭さんを何人も抱える裕福な商家であった。

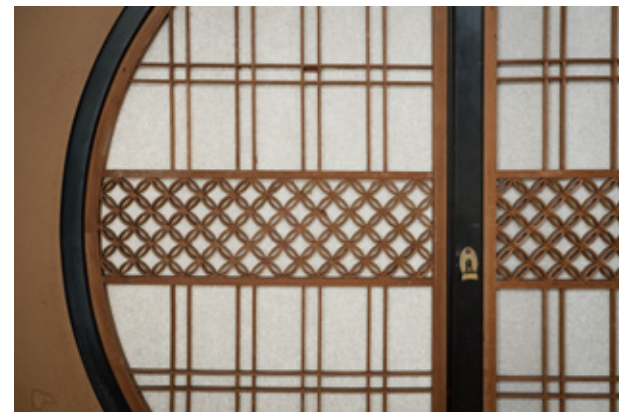
〈町の皆さんから伺った栄さんのエピソード〉

真面目で厳格な性格

・非常に真面目で厳格な性格もあり、矢崎家の商売を軌道に乗せた栄さん。当時子どもだった御田町の方々は庭に侵入したり、窓からテレビを覗き見たりしてよく怒られたのだとか。

情に厚い一面と責任感

・一方で情に厚い性格でもあり、戦後妻の甥が家や家族を失った際には「俺についてくれば悪いようにはしない」と言って家に受け入れ、息子のように可愛がったといひます。また、家に嫁いできた病気の女性がいた際には、親戚が追い出した方がよいという中で栄さんは「うちで面倒を見る」と意思を曲げなかったそうです。



調査研究レポート

旧矢崎商店では、建物の文化財としての保存・活用を目指し、令和6年度の1年間をかけて建物の価値付け調査を推進してきました。調査は主に主屋を対象として、特徴的な外観を含む「外」からの視点、細かな手仕事が詰め込まれた和風建築の内装を含む「内」からの視点の2チームに分かれて進められました。ここからはその調査内容を一部抜粋してご紹介します。



より詳細な調査の内容は
御田町文化研究会のWEBメディア
よりご覧いただけます

特徴的な外観の個性を考える

『外からの視点』

旧矢崎商店はその外観の特徴から「看板建築」と分類することができます。外からの視点の調査では、その外観を構成する「看板」部分の個性に関する研究が進められました。この調査を通して旧矢崎商店は通常の看板建築とは大きく異なる、希少性の高い意匠を有する建物であるということがわかってきました。ここでは「**周辺地域の看板建築との比較**」「**一般的な建物の様式との比較**」という観点からその内容をご紹介します。

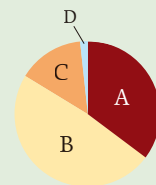
周辺地域の看板建築との比較から

旧矢崎商店の希少性を紐解く

旧矢崎商店の特異性を確認するため、今回の調査では下諏訪町の「三角八丁」と呼ばれる地域内で看板建築の調査を実施しました。調査では、旧矢崎商店の特徴的な意匠である「曲線」「アーチ」「庇」「コーニス」「ペランダ」を有するものがどれだけあるか？という視点から、地域の看板建築との比較を行いました。この調査の結果、旧矢崎商店と類似する建物はほとんどなく、特異性のある要素を多様に有する建物であるということがわかりました。

三角八丁エリアの看板建築 73 件における
旧矢崎商店との共通項の数

- A 1 つも共通点がないもの : 26 件 (35.6%)
- B 共通項が 1 つあるもの : 35 件 (47.9%)
- C 共通項が 2 つあるもの : 11 件 (15.1%)
- D 共通項が 3 つ以上あるもの : 1 件 (1.4%)
- E 共通項が 4 つ以上あるもの : 0 件 (0%)



近隣の看板建築との比較



近隣の看板建築



旧矢崎商店

建物の様式比較の視点から

旧矢崎商店の意匠を読み解く

ここでは建物の様式の視点から旧矢崎商店を見ていきます。旧矢崎商店と類似する外観を有する建物に、「旧朝香宮邸」があります。旧朝香宮邸は本格的な「アール・デコ」様式のインテリアを有する近代洋風建築で、全体としてはより近代的な「インターナショナル・スタイル」に近い様式の建物。この2つの国際的な様式の特徴を見ていくと、旧矢崎商店は両方の様式の特徴を有していることがわかります。こうした世界的な最先端の潮流を取り入れられたことの背景には、矢崎家が当時の最先端産業であった製糸業を扱っていたことがあります。先端産業に従事したことで得られた国際的な情報や感覚が、旧矢崎商店を構築したと考えられます。



旧朝香宮邸

【インターナショナル・スタイルの特徴】

1920年代から50年代にかけて現れる世界的に広まった建築様式。日本語では「国際様式」とも呼ばれる。

- 装飾を廃したシンプルな見た目
- 合理性と機能性を重視

【アール・デコの特徴】

1920年代から30年代にかけてフランスを中心にヨーロッパやアメリカで広まった工芸・建築・絵画等あらゆる分野における装飾様式。

- 直線的で幾何学的な模様
- 壁が厚みを有する
- 平面的な凹凸

旧矢崎商店にみられる2つの建築洋式の要素

旧矢崎商店はインターナショナル・スタイルを彷彿とさせる外観を有しており、その意匠的な部分にはアール・デコの要素を感じられるつくりとなっています。



装飾性が少ない
シンプルな見た目



タイルや外壁の洗い出しと
呼ばれる施工は耐久性を
意識した合理的なつくり



幾何学的な模様を有する
調度品



厚みのある外壁

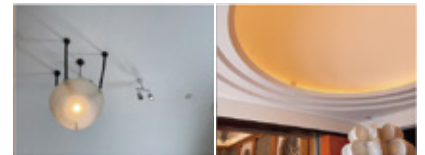


コーニスと呼ばれる水平な意匠

COLUMN 建築を想像する 看板建築に 詰め込む「憧れ」

看板建築とは、(その定義は様々ですが、)ファサード(建物正面のデザイン)が「防火性のある素材で覆われる」「衝立状の形状」「西洋建築風である」などの特徴を持つ建物のことを言います。関東大震災以降の東京でも多く用いられた様式で、防火対策という機能的側面を持ちつつ、独特のデザインを有するものが多いのも特徴です。そのデザインの背景には関東大震災を経て建てられた最先端の西洋建築群があります。当時の市井の人々は、そうした最新のデザイン要素を、見様見真似で看板建築に取り込んだのです。旧朝香宮邸が竣工したのは旧矢崎商店が竣工した3年前。もしかしたら、旧朝香宮邸を東京で見た矢崎栄さんが、その「憧れ」を自邸建築の際に取り入れたのかも？そんな想像が膨らみます。

▼ 旧朝香宮邸



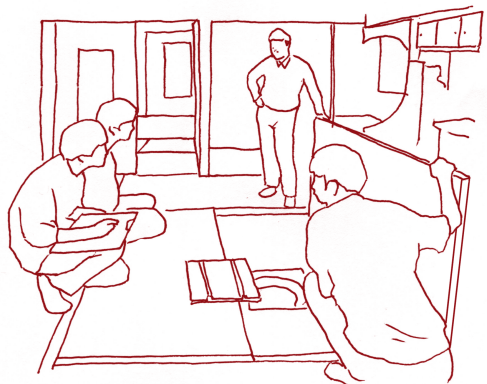
▼ 旧矢崎商店



質の高い大工仕事が光る内部空間

『内からの視点』

旧矢崎商店の主屋の竣工当初から残る部分は **近代和風建築** と呼ばれる建築です。近代和風建築とは、明治以降建築の西洋化が進む中、「洋」によって相対化された「和」の要素をふんだんに取り込んだ建築のこと。内からの調査では、旧矢崎商店の近代和風建築としての価値を **樹種** **壁材** **建具** **座敷飾り** といった視点から分析していきました。



諏訪大社の門前で育まれた 質の高い大工仕事

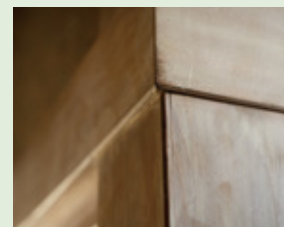
旧矢崎商店が有する価値の側面は「質の高い大工の手仕事」と言えます。デザイン性の高い建具や、壁の施工を見ることで、当時の腕利きの職人が丹精込めて施工したことがわかります。質の高い大工仕事が反映された建物、というだけでも建物の価値としては十分ですが、旧矢崎商店の独自性を高めるのが「その大工仕事の裏には大隈流・立川流に代表される大工を涵養した地域の歴史」が背景にある点。諏訪大社の門前で育まれた大工の技術が受け継がれてきた諏訪エリア。こうした環境の中で技術を磨いた棟梁「立石初三郎」により手がけられた旧矢崎商店には、その技術を反映するような手仕事を多く確認することができます。



素材から見る

新しいもの・古いものとの向き合い方

旧矢崎商店では様々な素材が使用されています。度重なる改装の際には当時の最新素材を取り入れつつ、古い素材も大事に利用していた様子を確認することができます。新しいものを適切に取り入れながら、古いものとも向き合う。そんな姿勢を感じとることができます。



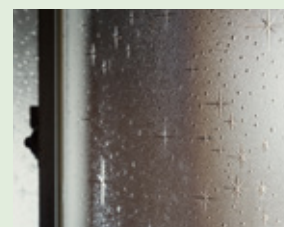
古材の活用

増改築した部分には、古材を活用した跡が確認できる。古材の表面に板材を貼り付けて再利用している。



壁の塗り替え

腕利きの左官職人が仕上げた様子がわかる壁。塗り替えの際にはその時々の流行を取り込んだと考えられる。



ガラスの使い分け

竣工当初から残る部分には当時のものがそのまま活用され、改装部分は当時の最新のガラスが利用されている。

座敷飾りから見る

型にはまらない自由な創造性



客間（1階）

赤枠のついている一番左の空間は通常の座敷飾りには存在しない。遠近感のある組子と共に空間の奥行きを演出したと考えられる。



居間（1階）

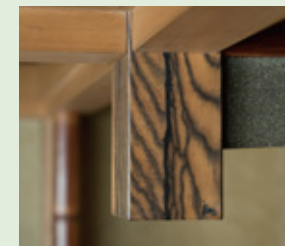
通常庭に張り出す付書院が庭に直行するように構成されている。庭の開放性を高め、空間としての居心地の良さや、日常的な機能性が意識されていると考えられる。

座敷飾りとは、「床の間」「床脇」「付書院」等から構成される空間を指します。座敷飾りには、その並びや構成における「型」のようなものがありますが、旧矢崎商店の座敷飾りには、その型にははまらないものがあります。そこには日常を意識した使いやすさや空間へのこだわりが感じられ、機能性と美意識が両立した独自の創造性を感じ取ることができます。

樹種・建具から見る

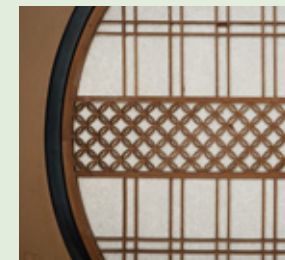
家に込められた想い

旧矢崎商店では「作り手や施主が込めた想い」を感じ取ることができる部分があります。建物に使用される樹種や組子の柄など、細かな部分からその想いに触れることができます。



樹種

部屋ごとに異なる樹種が使用されている。客間は檜等の高価な樹種が使用され、他の部屋と差別化を図っている。人を招く空間への思い入れが感じられる。



組子

組子の柄は縁起の良い意味を持つものがある。写真は「七宝」という柄。どの方向にも限りなく繋がり伸びていく様子から縁起が良い柄とされている。



COLUMN
「御田研」
建築を想像する
「蜘蛛の糸」に
込めた信条？

旧矢崎商店には他では見ることができない珍しい模様の組子を確認することができます。そのうちの一つが「蜘蛛の巣」の柄。旧矢崎商店には多くの仏像が残っていたこと、施主である矢崎栄さんは厳格な生活でありながら、困っている人を放って置けない人情に厚い性格であったことから、これは芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を表現したもので、栄さんの「信条」を表現したものだったのかも？と、そんな想像が膨らみます。何より、生糸問屋にとって「糸」はとても大切だったでしょうね。



下に行くにつれ間隔が狭くなるデザインは「地獄」に垂らされた「蜘蛛の糸」を想像させる

INTERVIEW

旧矢崎商店の建築調査を行っていただいた、
信州大学工学部建築学科 梅干野研究室の皆さんに
旧矢崎商店の魅力や、まちづくりに対する考えを
お伺いしました。



梅干野 央 准教授



森田 真央さん



竹田 芽生さん

足元にある大切な資産を活かすための 調査研究

——梅干野研究室の研究テーマについてお伺いできますか？

梅：日本建築史の研究を行っています。歴史的建造物の調査を行ってその建物の価値を把握し、その価値をもとに保存や活用について考えていくというのが研究の主題です。最近では特定の地域からご依頼をいただいて、地域の景観を守りながら、今後のあり方を考えていくような調査研究にも関わらせていただいています。

——活動エリアはどのあたりなのでしょう？

梅：基本的には手の届く範囲、北信・中信が中心です。長野県は価値のある建築がたくさん残っているので、活動フィールドとしてはとても恵まれていると思います。一方で、そうした地域資源は大量にあるので自治体としても対策が取れていないのが現状です。ストックすることしかできていなかったり、ストックすることすらまなかつたりして、積極的な保存・活用ができていないことが多いです。私たちとしても地域の素晴らしい景観を維持したいという思いで各地域のプロジェクトに取り組んでいます。歴史的な建築資産をどう保存していくのか？は地方のまちづくりにおいてもとても重要な観点だと思います。

地層のように積み重なる時代や趣向

——旧矢崎商店を初めてみた時の印象を教えてくださいませんか？

竹：道路側の外観を見た時は可愛い建物だなと思いました。けど一歩中に入ってみると豪華な近代和風建築で、そのギャップに驚きました。外は可愛らしいのに、中はカッコいい。その印象の差がとても記憶に残っています。

森：私も外観の印象の可愛らしさは印象に残っています。ギャップももちろん魅力だと思いましたし、外観だけ見ても、他で見たことのないとても個性的な外観で、特徴的な

建物だなという印象を受けました。

梅：私も可愛らしい建物だなとは思いましたが、事前にいただいた資料で写真を拝見した時には「旧朝香宮邸だ」と思いました。アールデコで有名な名建築・旧朝香宮邸。そんな旧朝香宮邸に対する憧れを反映した建物なのではないだろうか？そんなイメージが湧いたのを覚えています。

——今回の調査では「外」と「内」それぞれから調査を進めていただきました。この調査方針はどのように決まったのでしょうか？

竹：外観と内観に大きなギャップがあって、雰囲気が全く異なるのが旧矢崎商店の特徴なので、外と内それぞれから価値を紐解いてって、最終的にそのそれぞれを結びつけていくという方針になりました。

梅：建築はいろいろなものが地層化していくんです。左官仕事なんかはその象徴ですが、時代の流れや流行、個人の趣向など、変化していく価値観が建築に反映されて、地層のように折り重なっていく。それを読み解いていくことで建物に込められた想いやその土地の歴史なんかが浮き彫りになってくるんです。そのためには壁、建具など細かな要素を見ていくこともとても重要なことだと思います。



町の歴史と作り手の想いの詰まった 個性的な建物

——旧矢崎商店の魅力や面白さはどのような点にあると感じますか？

竹：他に類似する建築がないというのはやはりとても魅力的だと感じますし、美意識はありながらも機能性も兼ね備えている点も面白いと思います。外観のデザインに対するこだわりや、細かな色使いには高い美意識を感じますが、そうした一方で洗い出しでの仕上げやタイルの使用など、耐震性を考慮した合理的な作りにもなっている。相反するように思われるような観点や価値観が、うまく両立されているところにこの建物の魅力があると感じました。

森：調査を始めた段階ではわからないこともたくさんあったのですが、個別に調査を進めていくうちに見えてくる特殊性がたくさんあって、その過程自体に魅力を感じました。例えば私は座敷飾りについてはほとんど知識がなくて、何が普通なのか？ということもわからなかったんです。けど調査が進むと旧矢崎商店の座敷飾りはかなり特殊な作りであることがわかりました。そうした特殊性がたくさんあることで想像力も膨らむ。このこと自体が旧矢崎商店ならではの面白さじゃないかなと思いました。

——矢崎栄さんがどんな想いを込めて作ったのか？そんな想像力が働くのもとても面白いですね。先生はいかがですか？

梅：一つは、建物の魅力が何れも下諏訪町の歴史と密接に結びついているところじゃないかと思います。

質の高い大工仕事の背景には大隈流・立川流の系譜を引いた地域の歴史的な環境があるし、その技術力を実現させた背景や、国際的なデザインが反映された背景には町で製糸業が隆盛したことがある。歴史との結びつきが建物一つの中から見て取れるのはとても面白いですね。

ちなみに、大工仕事ということで少し話すと、この外観を構想したのは大工ではなく左官屋だった可能性もあると思って

います。擬洋風建築では左官屋がその構想に関わっている事例が多くあるんです。

矢崎栄さんの憧れと、左官屋をはじめとする職人のアイディア、みんなが一緒になって家を作り上げていく、そんな共同作業が行われていたんじゃないかなとも想像できるんですね。

——あらゆる人の思想が反映されている建物に見えるということですね。

そうですね、そういうこだわりを感じます。あと面白さということ言うと、単純にあの外観は他ではみたことがないんですよ。他の地域でもまずないんじゃないでしょうか。かなり個性的です。内観も「さすが諏訪の大工の仕事だな」と感じましたし、とても質の高い建物だと思います。



内在する価値を発見していくこと

——下諏訪町には旧矢崎商店のような古い魅力建物がまだ残っています。今後こうした建物とどう向き合っていくべきでしょうか？

梅：まず、旧矢崎商店はとてもいい機会になると思います。歴史的な資産を大切にしながら今後の時代を作っていくという意思表示にも感じられます。

ただ「点」だけではもったいないと思うので、こうした取り組みが「線」となって、「面」となっていくと大きな意味を生み出していくと感じます。町の中にどういった建築資産が

あるかを把握した上で、それをどう引き継いでいくのか？そういったことを構造的に検討して、移住や観光といった観点とも絡めながらまちづくりの活動に繋げていけるととても理想的だと思います。

——旧矢崎商店のプロジェクトが起点になって、少しずつ町にも広がっていくのは素敵ですね。

梅：下諏訪町はとても魅力的な町です。なので決して都会的なまちづくりを目指すのではなく、下諏訪でなければできない町づくりが進んでいくといいなと。今町に残っている歴史的な建築資産をどれだけ活かしていけるか？という観点は、そうした「らしさ」の獲得にも確実につながると思います。今色々な地域がこうしたことに気付いて取り組みを始めていますが、まだどこも模索期だと思います。一方「成功」とされているところも観光に振り切りすぎて「らしさ」を失っている側面があったりします。商業活動が盛んになるのは良いことでもあります。行き過ぎてしまうとバランスを崩してしまう。そうしたバランスも意識しながら、らしさを引き出すまちづくりのあり方が、今後求められていくと思います。わかりづらいかもしないけど、価値は地域に内在しているんです。そうした価値を発見していくことが大切ですね。私たちもそうしたことのお手伝いできたと思いますし、設計のプロでもあるヘリテージマネージャー（文化財建造物を活かす活動に精通する建築士）の方たちとの協働も必須であると思います。

——そうしたことを実現していくために必要なことはどういったことでしょうか？

地域の地力というか、内側から生まれてくるものが必要だと思います。僕らもある意味外からの目線でお手伝いをしていくことはできますが、地域の中の人たちと一緒に取り組んでいかなければ、活動が継続していかず、結局一時的な取り組みになってしまう。

外の目線、中の目線、両方を取り込みながら進めていける体制が理想的ですね。